



変わるものと変わらないもの

― 身の辺の保育の中で ―

津守 真

私の身の辺で

最近私は毎週二日、保育の現場に出ている。私が長年かかわってきた愛育養護学校の現場である。近年、幼児が減少していたが、今年はどういうわけか急に幼児が増えた。養護学校を必要とする幼児が増すのはよいことなのかどうか、疑問のあるところだが、私共の養護学校はむかしから、障害をもつていようといまいと、幼児の保育は変わらないと考えてきたから、いろいろな幼児が楽しみにして来てくれるのは嬉し



い。幼児と交わるのは、私にとっては故郷にもどるようで、力が湧いてくる。

そうは言っても、集まる子どもによって、具体的な保育の仕方は違ってくる。障害をもつ子どもが多く集まる私共の学校には、長年の間にそれなりの文化が生まれるのもまた当然である。

養護学校と幼稚園

最近、私共の養護学校にも、時代の変化を感じさせられることがある。障害をもつ子どもと通常の学校や幼稚園の子どもとが混じる機会が増えたことはそのひとつである。以前だったら、小学校、幼稚園と養護学校とは別の種類の場所だという観念が社会一般にひろく行き渡っていたが、最近では、学校制度は違っても、一緒に付き合ってみれば、子どもはだれでも親しみ深く、互いに学ぶことが多いことが、大人にも子どもにも分かり始めてきたと言っていてよいだろう。決してまだ十分とは言えないけれども。

私共の養護学校と金網の柵を隔てて幼稚園がある。子どもたちの賑やかな声が聞こえると、そちらに行きたい養護学校の子どもがいる。そのときに一緒に出掛けて行く、最近では幼稚園の先生方は喜んで迎えてくれるようになった。最初は、子どもはこちらの部屋からあちらの部屋へと探索してまわり、一緒に行った私は気がでないことが多かった。互いに他の子どももの持ち物にさわったり、しきたりとは違うように

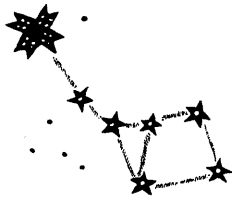


行動したときには、間に入る大人はどうしたらいいか戸惑うことがある。神経を使い過ぎると不自然になるし、間で執り成しを必要とする場合も少なくない。けれども子どもは他の子どもたちのすることを見ていて、互いにそれなりに馴染んでいった。幼稚園の子どもが養護学校に来るときも同様である。理念が先立つのではなくて、子どもたちの中の自然さが大事なのだろう。勿論、大人の側に相互の理解を深めようという努力が下地にあるのだが。

私共の養護学校で、このことに先鞭をつけてくれたのはまず兄弟姉妹たちだった。長年の間に、一、二歳のころから、養護学校で自分たちが遊び親しんで成人した子どもたちは数多くいる。そういう子どもたちが最近更に多くなっている。

それぞれの子どもが納得するように

ある日、帰りの時間近くに私が幼稚園に行くと、窓越しに私をじっと見ている子がいるのに気が付いた。私が笑い返すと、「おじいちゃん、待っててね」と手を振って私を呼んだ。最近地方から養護学校に転校して来た子どもの弟の四歳のRくんで、彼は幼稚園に入園している。幼稚園が終わると駆け出して来た。幼稚園から戻ったばかりの子どもには、緊張から解放された激しさがある。この日のRくんは声も大きく、動きも激しかった。養護学校のホールでは隅の櫓の上でひとりの子どもが遊んでいた。Rくんは櫓の下にあった籠にピンボウルを入れ、苦心して籠に綱をつけて櫓の上



に引き上げた。櫓の上にいたもうひとりの子どもは、その籠の中のピンボウルをひとつずつ籠から取り出して斜面を下に滑らせた。Rくんは、自分が発見して吊り上げた籠の中の物を勝手に落とされたので、激しく怒ってその子に掴みかかろうとした。こういうとき、養護学校に所属する大人としては、まずこの場所の主人公である手足の不自由な子どもを守ろうとするのは当然である。私もそうだった。私は何か道徳的なことを言おうとしてRくんを見たら、怒って真っ赤になったRくんの顔は涙でくしゃくしゃだった。本当に真剣で、この子をそのままにしておけないと思った。

保育者は、あるときには他のことはおいてもその子をしっかりと守らねばならないことがある。このときの私はそんな気持ちだった。「おじいちゃんが助けにいくからね」と声をかけて急いでRくんの傍らに行った。この子どもは体の不自由なきょうだいのために譲らなければならない場面を多分何度も経験しているだろうと私は思った。こういうとき何と言ったらいいか、とつさに考えて、「これはおじいちゃんが守ってるからね」と、しっかりとRくんを抱いてピンボウルを籠に戻した。しばらくこの子の傍らにいるうちに、じきにこの子は立ち直った。

この子はピンボウルのことは忘れたかのように、櫓と壁のすきまの狭いところに入りこむことが面白くなった。ピンボウルを滑らせた子も同じことがやりたくて、一緒に狭い空間の中で、物を渡したり受け取ったり、やりとりが始まった。私はほっとすると共に、子どもの力はなんと大きいことか、感心した。相手の子にとっては元気の



良い幼稚園児の迫力を受けるのは重すぎる荷だったかもしれないが、この子たちはよくそれを持ちこたえて一緒に遊ぶ体験をした。納得しないままに大人の道徳観に従うのとは違う、もっと人間的な体験だったと思う。近ごろ私はいろいろな子どもで似たようなことを経験している。

異文化を尊重する

幼稚園のK園長先生は、交流を進めながら「互いの文化をだいじにしましょう」と言われる。私もそう思う。同種の仕事をしていても、長年の間につくってきた小さな手順、しきたり、考え方、つまり文化には違いがある。そのようになっていく「いま」を互いに尊敬することが第一ではないか。養護学校の子どもが幼稚園に行けばその家風に従うし、幼稚園の子が養護学校に来れば、こちらの家風に従う。そして両方の子どもが交わったとき、具体的に葛藤が起きれば、子どもたちが納得するように大人が間に入って（あるいは入らないで）経過をたどるうちに、新しいやり方が生まれるのではないだろうか。

変化の時代には、どのように変化するかは分からぬままに、ひとりの人間に戻って、人の中に良いものがあることを信じて交わってゆくよりほかない。そして、幼児は新しい社会をつくる対等な一員である。